

第1回 西胆振地域づくりビジョン懇談会 議事録

日時：平成20年8月6日（水）14：00～16：00

場所：西いぶり広域連合 会議室A

【次 第】

- 1 開 会
- 2 挨拶 西いぶり広域連合事務局長
- 3 議 事
 - （1）地域づくりビジョンの潮流について（座長）
 - （2）広域連携による地域づくりについて（各メンバー）
 - （3）意見交換
 - （4）その他
- 4 閉 会

<出席者> は座長

室蘭工業大学教授 永松 俊雄 氏
室蘭ルネッサンス理事長 平 武彦 氏
室蘭まちづくり放送株式会社代表取締役社長 沼田 勇也 氏
登別市市民自治推進委員会会長 田中 寛志 氏
登別市市民自治推進委員会部会長 川島 芳治 氏
伊達市連合自治会協議会会長 和田 勉 氏
社団法人伊達青年会議所理事長 鈴木 敏則 氏
いぶり噴火湾漁業協同組合豊浦支所長 長谷川 幹雄 氏
壮瞥町連合自治会副会長 千田 重光 氏
壮瞥町行政評価委員会会長 松永 美継 氏
洞爺食品有限会社会長 塚本政寛 氏
洞爺地区自治会連合会副会長 桑原 敏 氏

<欠席者>

NPO豊浦観光ネットワーク理事長 高岡 正義 氏

<オブザーバー>

室蘭市、登別市、伊達市、豊浦町、壮瞥町、洞爺湖町、檜山支庁、
(社)北海道未来総合研究所

<事務局>

西いぶり広域連合

1 開 会

2 挨 拶

西いぶり広域連合・表事務局長より開会にあたって、挨拶を行った。

【要 旨】

昨年、西胆振地域の3市3町でフォーラム開催した際には、将来的に西胆振地域を一つに、ということとまとまった経緯がある。それを受け、今後に向けて、行政でも研究会を設けて報告書を作成したところである。

広域連合は馴染みが薄い組織だが、廃棄物処理、共同電算の運営を行っており、消防も再編に向けた取り組みをしている。地域の運営は広域連携だけで行えるものではないが、介護保険認定や事務業務なども検討しているところである。

今回は合併ありきの議論ではなく、地域が連携してひとつになったらどんな夢がもてるのか、この会議の中でいろいろとご意見いただき、それを今後、行政から地域住民に示していきたいと考えている。3回程度の短い中ではあるが、よろしくお願いいたします。

事務局より、資料確認と簡単な説明があり、運営要領についても、特に意見等はなく了承された。また、出欠についての確認があり、その後、事務局より室蘭工業大学・永松教授を座長としたい旨、提案があり、了承された。

3 議 事

(1) 地域づくりビジョンの潮流について

永松座長から、地域づくりビジョンの潮流について、説明があった。

【要 旨】

4月に室蘭に来てまだ4ヶ月しか経っていない。地域のことについて、勉強しながら参加したいと思う。1980年代は「地域の時代」と言われ、地域ビジョンが盛んにつくられた。しかし今では、財政状況もそうだが、社会の流れが速く予測がしにくいいため、以前に比べビジョンがつくられにくくなっている。

ビジョンとは将来像であり、目的地を明らかにする意味があるのと同時に、そこにたどり着くルートを明確にするという意味がある。ルートがないと実現しない。

この地域で取り組むことの第一歩として、「行く先」を明らかにしていくというのがここでの趣旨だと思う。

それからもう一つ、最近では、合併・広域連携がよく話にあがる。昭和の大合併では、行政の仕事の領域が広がり、小学校の範囲から中学校の範囲というように地域圏域が拡大していった。平成の大合併は、これまでの市町村単位では対応できない、より広域で対応すべき問題がたくさん出てきたことが背景にある。

合併は単なる一つの手段すぎない。一つの家それぞれに必要なものを持ち込むより、可能なものをシェアするほうが効率的であるという点で、理論的には合併は行政効率を高める。合併したら不便になるとも言われるが、それは合併が原因ではなく、合併をどうやるかに関わるものだと思う。行政効率を上げる一つの選択肢が合併だと、私は考えている。

(2) 広域連携による地域づくりについて

各メンバーより、それぞれの立場から、広域連携による地域づくりに関するコメントをいただいた。

○平 氏

現在、財団法人室蘭ルネッサンスの理事長をやっている。昭和 64 年当時、新日鐵の高炉が休止になるとの話があり、そのことで室蘭の町自体がなくなってしまうのでは、という危機感から、アメリカのピッツバーグなどを視察して、室蘭市民全体に出資を募り、室蘭復興のための財団をつくった。1 億円程度の基金が集まった。

結局、高炉が休止せず残存することになったが、行政に頼らず、移住後 1 年間優遇されるウェルカムパスなど、自分達でもできることを続けている。

○沼田氏

地域に情報をしっかり伝え、町を愛してもらおうという活動として、コミュニティ FM の運営を行っている。西胆振地域全域に電波が飛んでおり、活用してもらえと思う。

室蘭の PR だけでなく、近隣の市町村の PR もしていきたいと考えており、地域の方々の協力をもらって、広く情報を集め、そして発信していきたい。

ただ、そういった受け身の活動だけではなく、いろいろなことに取り組んでいきたいとも考えている。平委員のように、市民活動をしている方は結構いるが、そういう人がいることを知らない人が多いし、自分ではそんな難しいことはできないと考えている人が多い。もっと自然に関われるような機会を増やしていくことが大切だと思う。

温泉が各市町にあるので、そういったものをめぐるツアーをつくって、全国から観光客を呼ぶことができるかもしれない。地域の人も入って歩くといったことができるかもしれない。小さな町の中だけで考えずに、西胆振全体が盛り上がるようなことをしていけたらと思う。

市町村が一緒になるといった難しい話だけではなく、おもしろいこと、町民に関わりやすいことからやってみて、実は連携することで生まれた力だと感じてもらうような流れがあるといいのではないかな。

○田中氏

まちづくり基本条例に基づき立ち上げた市民自治推進委員会の会長をしている。

選挙において、中立な立場から公開討論会などを実施し、名前を連呼するような選挙運動ではなく、市民が考える情報を伝えるような選挙が市民自治には必要だと思う。

西胆振広域ネットワークについて自分なりの考えをいうと、現状として、6 市町ある西胆振の中で、隣のまちのことを 100% わかっているかというと、それはない。せいぜい、市民サイドでの人のつながりの範囲での交流に限られている。しかし、地域の資源をデータベース化していくことが必要ではないかと思う。それぞれの市町村の良さが、いつ、だれでも情報を手に入れられ共有できる。そうすれば、人、物の流れが生まれるだろう。

私は、行政と経済は別だと考えている。行政区域とは関係なく、人や物の流れが生まれる。それを生み出すような仕組みにせず、行政区分にこだわってはいつまでも非効率なままになってしまう。

こういう機会を利用して、6 市町の方々と情報を共有していきたいと思う。

○川島氏

田中委員が会長の自治推進委員会の下に 6 つある部会のうちの教育・文化・スポーツの部会を担当している。もともと、まちづくりはひとづくりという観点から、子どもの健全育成に取り組んでいる。また、その中で、協働のまちづくりのメンバーにもなっている。

登別は観光のまちだが、どこも同じだと思うが、観光客は減少傾向にある。中国等からツアーは来

ているが、それほどお金が落ちているわけではない。西胆振地域を網羅するような観光ルートをつくっていくということも考えている。

また、日中はほとんどサラリーマンは室蘭へ行っており、雇用の場が地元にはない。雇用の場が地元にはないということは、圏外への人口流出が大きいということで、札幌や東京に出て行ってしまう。地域が一体となって、この問題に取り組んでいく必要があると思う。西胆振にはいろいろな産業がある。それぞれが連携し、地産地消の取り組みを進めていくのがよいだろう。

○和田氏

伊達市は大滝村と合併して、新しい都市計画の作成作業が進められているところである。相乗りタクシーや高齢者の住宅確保などを行政がやっているところであるが、今後は、これらを地域住民がいかに取り入れ、地域の中で活かしていくか、が考えられなければならない。循環バスが走っているが、人が乗っていないことも多く、地域交通を見直す委員会などを市が行っているところである。

また、元気な高齢者になってもらうためにどうするか、ということを考え、地域スポーツクラブ設置に向けた努力なども行っている。そういったことが、この西胆振全域にどう広めていくかということをは話し合いながら考えていかなければならない。

○鈴木氏

伊達青年会議所では、「ひとづくり・まちづくり」ということで、活動しているが、今年度は物質的な豊かさではなく心の豊かさをテーマに活動している。自分の子どもや孫が安心して豊かに暮らせるように、自分たちは生きているのかということを考えてながら活動をしている。

6市町が一緒になった場合にどういうことができるのか、というビジョンを作り上げていく会議だと聞いている。西胆振が一つになった場合の具体的なイメージは無いが、がんばりたい。

○長谷川氏

噴火湾漁業協同組合に勤めている。豊浦町は合併しないで独自でやっていくということでしており、一次産業としては、他の地域とバッティングしないように、豊浦がうまく回るようにやっている。

豊浦町では、人口がだんだん減ってきており、半数が65歳以上と非常に高齢となっている。

6市町で採れるものは似たようなものなので、他の地域と競争しようとしても、まち単独では太刀打ちできない。西胆振が一体となってやっていくことが大切だろう。連携してPRして物を売ってきたい。

また、豊浦町では自治体病院を抱えており、医師不足などの問題が出ており、地域で見ても、小児科医院が少ないとか分娩が苫小牧や室蘭まで行かないとできないなどの課題がある。そういったことも課題として書かせていただいている。

各市町と手を携えていければいいということで参加している。

○千田氏

連合自治会の副会長の立場ではあるが、久保内自治会の会長という立場で資料については記載させてもらった。久保という地域は100世帯程度だが、学校や病院、保育所などの施設を一自治会内に抱えており、社会体育、文化財の伝承活動など多様な役割を担って、小さな町から大きな取り組みの発信ができていているという自負を持っている。

壮瞥町は「合併しない」という意思で、それなりの覚悟をもって運営をしている。今回の趣旨も合併ありきではない、という話だが、最終的には小さな地域は置いていかれるのではないかと、意識を強く持っている。小さなまちでも大きなまちと連携すればできることがたくさんあるということ、を、広域連合の活動を見ていて思う。一人ひとりが知恵を出すことで、いろいろな課題が解消できる

のではないか。

○松永氏

国際雪合戦の統括を担当しており、町の政策評価委員会も担当している。

伊達市との合併協議から外れたが、広域連携は合併をしなくてもできると考えている。広域で連携を図りながら、それぞれが効果的な手法をとっていくことはできるだろう。共同作業的にお互いが納得できる、あるいは便宜性や有利性に標準を当てながらやっていける方法があるのではないかと考えている。

西胆振での広域連携を考える場合、それぞれのまちが特色を持っているが、その特色を連携によりさらに生かせるということが最大の利点だと思うが、連携、合併は効率的にはなる分、それに伴うリスクも範囲が広がれば広いほど大きくなり、逆に非効率な面が出たり、地域格差が拡大する可能性もある。

広い視野から考えると、西胆振というのは一つの小さな地域と考えることもできる。そんな小さな地域でそれぞれの特色を有効に活用して、地域にどのような効果を返していけるかを考えたい。

○塚本氏

私は、虻田町・洞爺湖町の合併、同商工会の合併に関わったことから、この場に参加していると考えている。合併については、経験として、行政から出てきた資料を自分達で検討するのが精一杯で、将来の夢を語るような余力がなかったというのが正直なところ。本来は、まずは地域の夢を語り合った上で、具体的、現実的な話に入っていくといったことが必要ではないかと考えている。当時は、現実問題として経費削減をどうするか、ということを考えないと、解決の糸口が見つからなかった。

合併後2年が経ち、ようやく虻田、洞爺湖の相互の理解や具体的な運営体制が整ってき始めている。地域には資源がたくさんある。遠方から来る長期滞在型の観光客を獲得するために、どのような連携をしていけるかを考え始めたところである。合併した後に人が減ってしまっただけでは意味がない。合併して経費を減らしても、人が残る、増えるような行政のあり方、周辺地域を巻き込んだ取り組みの方法を考えていかなければならないと思う。

サミットも無事終わったが、環境対策をはじめ、医療・福祉など広域での連携がどうしても必要な部分について、広域連合である程度解決してほしいし、地域内での連携ができれば解決していけるものだと思っている。自分ひとりでは解決できない。個人的にも室蘭テクノセンターに相談し、いろいろとアドバイスをいただいたことで、すばらしい機械を導入することができた。地域でもそういった助け合いができればいいと思う。

○桑原氏

サミットにより洞爺湖は国際的に有名になった。今後、国際会議の開催なども可能性があると考えている。サミット開催以前は、洞爺湖を知っている人は関西以西にはほとんどいなかった。他の地域も含めて、かなり西胆振という地域の知名度があがってきていると感じている。今後、国際的な面も含めて、観光ルートの整備をしっかりやっていくことが重要だと思う。資源には不自由しないと思う。

室蘭工大の技術なども活用して、農水産品などの地域資源の活用を行っていくといいのではないかなと思う。

観光ルートの整備ということについて、是非入れてほしい、核として考えてほしいのが、洞爺湖周辺にある58基の野外彫刻である。本来、これは国際的な観光資源としたいという意図があって、これまでは国内でもあまり有名ではなかった洞爺湖だったが、サミットで注目を浴びたいま、この彫刻を観光資源として活用していく絶好の機会と考えている。

○永松座長

一通り話をいただいたが、各委員の話を整理すると、

- ・連携が相乗効果を生み出している、生み出す可能性がある
- ・地域の価値を見直すべき、知らないことが多い
- ・情報発信も協働で行うことで効果が高まる
- ・合併しなくとも、連携で効果を生み出すことも可能

といった意見が出ていたように思う。

(3) 意見交換

それぞれの発言や資料などをもとに、ビジョン全体に関して意見交換を行った。

○永松座長

ビジョンの骨子が出てくると、絞った意見交換もできるが、まだビジョンの提案がない状況ではあるので、それぞれメンバーが思っていることを話してもらいたい。

発言として一番多かったのは観光面であったが、雇用、農水産業などの話もあった。

それから、参考資料として「65 才からの挑戦」のペーパーを渡している。ビジョンを考える際には、あきらめず、いくつになっても元気で目標を持って、楽しくがんばりましょう、というメッセージを込める意味でもお渡ししたものである。

それでは、早速議論に入っていきたいと思う。

○平 氏

先ほど話しそびれたが、西胆振のフォトカルチャー事業というのがあり、地域の写真をアーカイブして全国に発信しようという取り組みを行っている。この事業で、地域にはたくさんの素晴らしい人材がいるなということが初めてわかった。

それから、洞爺湖サミットの際に大使を案内したのは刀鍛冶の実演で、非常に興味深く見てもらうことができた。

新日鐵の工場見学は、小中学校の体験学習などで見たいという声があり、工業は外から見るときれいなものではないが、有効な観光資源となりうると考えている。

また、有珠山が 25 年に一度噴火すると言われており、防災といった面で、道路整備などについて考えていくべきだと思う。何度かワークショップをやった際には、伊達の人から「公共工事で室蘭が潤うだけ」と切り捨てられたが、そういった災害に対する意識の醸成は必要だと思う。本当に私たちは、他の地域のことをよく知らない。地域の行事や特殊性、歴史などについて学ぶ機会が必要だと思う。お互いに知り合い好きにならないと話も進みにくいので、知識の水準が上がるような会議にしたい。

○千田氏

噴火の関係で昭和新山への観光客がぐっと落ち込んだ時期があった。特に冬。人の来ない冬に何とか観光客を呼び込めないか、ということで若い人が考えて、北海道には雪があるので、そこから生まれる体験を考えた結果が雪合戦だった。今はスポーツという捉え方になっているが、はじめは広域で観光客を呼び込むための考えだった。

○和田氏

観光を滞在型にしていくというのが大事だろう。伊達には、仏教、武家文化など全国でも有数の文化をもっているのに、伊達は通過型観光になっていて、洞爺湖に行く途中で 1 時間半くらい寄だけの地域となっている。体験型の観光プログラムをしっかりと用意し、旅行会社や宿泊施設と連携して、

周遊体験をしてもらうような方策を広域的に考えていく必要があるのではないか。

○桑原氏

本州や海外から観光客が来ると、新千歳、札幌に行く。地域内には、温泉としては洞爺湖も登別もあるが、どちらも泊まっていくか、ということ、そんなことにはなかなかならない。西胆振に滞在する日数を多くするための、地域の連携は必要だろう。

子供たちに提供する壮瞥のくだもの狩りツアーなど、対象を絞った試みを組み立てていくことが必要ではないか。観光客は西胆振だけを考えているのではなく、オール北海道で考えているので、魅力的なコース、プログラム設定が重要になる。

○川島氏

代表的なルートは洞爺湖、登別となっているが、西胆振全域で考えていかないと、観光客数は落ちていくばかりだろう。資源はたくさんあるのだから、それを活用すべきだ。

○桑原氏

家族、ゴルフ好きの大人など、いろいろな主体に対応したしっかりとしたルート設定をしてあげることが大事だと思う。サミット絡みでサミット会場をまわるようなツアーのニーズもあるが・・・。

○田中氏

問題は、機動的に使える移動手段がないことではないか。公共交通機関では、旅行するのが大変である。すぐにチャーターできるような4～5人乗りのタクシーなり、マイクロバスというものがあって、連動するミニツアーの企画がある、といったように、各地域でコンピューター機能を持つことが重要だろう。

大手ツアー会社にはできないことを、地域の小さな旅行会社との連携で対応していくというのも一つの選択肢である。

○千田氏

自分も含め、ネットで検索して観光する人が増えているが、各ポイントごとの情報が得られず、分断されている。そういった分断された情報を関連づけして情報発信できる物があればよいと思う。今は年寄りもネットで情報を収集する時代である。

○沼田氏

田中委員の話にもあったが、この地域にはジャンボタクシーがない。大きな団体旅行が見込めるならともかく、そういう時代ではないので、小さな団体に対応した足の確保、もっと動きやすい道具というものが需要ではないか。

富良野地域は、観光客から見ると「富良野」という地域として捉えられていて、しっかり観光しようと思うと、いろいろなものがあって2～3日はかかる。それでも、魅力ある地域全体の売り込みができていて、統一的なカラーがある。「うちは中富良野だから」というようなことがなく、一体となって「富良野」を売り込んでいっている。

私たちも、西胆振地域を全体として愛するような形で、一体となって観光ルートを考えていくべきだろう。地域の声を聞くと、「室蘭なんて」という声が多いが、それでは観光客は来てくれない。

雇用の問題、若者の流出についても、出て行ってしまうのはある程度仕方がないとしても、戻ってきてもらうための取り組みをしていく必要がある。簡単ではないと思うが、地域にいる経験豊富な人材が若者を育てるようなまちづくりも必要ではないか。起業などもしやすくなり、雇用の場も生まれると思う。

○松永氏

外から来る人にしてみれば、どこの自治体かなんていうのは関係のない話である。以前、火祭りに関する問い合わせが隣の観光協会にいったお互いに困る、などという話もあったが、事前に連携がなされていれば、問題なく対応ができる話で、いまはうまく連携している。

雪合戦については、周辺地域とうまく連携してやれるようになったが、そういった取り組みがスムーズに進むような体制づくりが、どこかの主体を中心に進められれば、もっと効果的な取り組みができるのではないか。

○塚本氏

逆に、地域資源ですばらしいものがあったとしても、扱っている本人にその自覚が無くて、外部からの観光客が来たときにびっくりしたなどという話も聞いたことがある。

室蘭の産業資源は、行ってみるととても驚きが多く、魅力的な観光資源だと感じた。行ってみてはじめてわかることもあるだろう。

地域ではあまり関心のないことでも、外の人には新鮮に映ることもある。そういったものをうまく絡めていくことで、大きな効果が期待できるのではないか。

情報発信をうまくやっていくことで、まだまだ可能性のある地域だと思う。

○田中氏

地域の観光協会を統合して、西胆振広域観光協会のようなものをつくり、全ての市町の情報をうまく集約・PRできるような体制をつくっていくことを提言したい。

○永松氏

観光PRなどを考えた場合、単独市町よりも地域ブロックレベルで対応するほうが効果が非常に高いということはわかっている。話にもあったが、一つの地域資源で観光客を満足させることは難しい。周囲にあるいろいろな資源の組み合わせを考えていくことが大事である。洞爺湖温泉に泊まりたいという人もいれば、普通の農家に泊まりたいという人もいるかもしれない。観光客の選択肢を広げていくことが大切である。そういった試みをやろうとしている地域も出てきている。早く協力をして、地域資源を共有する仕組みを作っていくべきだろう。

室蘭は「きれいなところ」という印象を持ったが、地域の人は「汚いところ」という印象があるようだ。住んでいるところに誇りを持つことが、観光客誘致においては重要でないかを感じる。

観光のことで、まだいろいろと話したいことはあるかもしれないが、今日は1回目ということで、話したりないことは書き留めておいて事務局に後日でも伝えてほしい。

次に、少々難しい問題ではあるが、人口が減少する中で、他地域への流出を防ぐための手立てに関して、意見等はないか。

○平 氏

一次産業については、国策的な問題となるので、ここでどうこうという議論をするのは難しい。

若い人材に、「地域産業を支えろ」と言っても、個々の努力では難しい。政策的な問題だと思う。商売は「儲かる」ということが分かれば、自然に人は集まってくる。将来に対する見通しが見えないから、人が離れていくということだろう。

今は東京に行かないと青春を謳歌できないといった時代ではないので、問題は生き甲斐や生活の不安定さだろう。

○鈴木氏

観光にしても同じだが、子どもたちが自分のまちの歴史や文化を知り、誇りを持ってもらうように

することで、地域に残ってもらえる、あるいは帰ってきてくれるということになるのではないか。人づくりが大事だと思う。

○塚本氏

私は製造業をやっているが、人を雇おうとしても人がいない。人がいないから産業が大きくならないのか、産業がないから人が来ないのか。いずれにせよ、人が定着するための「安心して暮せる場所」という基盤が重要になるのではないか。

○田中氏

塚本委員と同意見だが、雇用の場を確保したければ、企業誘致をするのが一番早い。とはいえ何でも来てもらえればいいというものでもない。地域にある企業や地域で実施されている取り組みをしっかりと把握し、それを光らせる方法を考えていくことが必要だろう。

町としての、人間としての魅力をどう出すかによって人も物も集まる、といった話があったが、そういったことを自分の企業にフィードバックできるかにつきると思う。

ないものを数えてもしかたがないので、汗をかき、知恵を絞りながら、どうしたら良くなるかを連携して考える、どうやったら支え合って一緒にやっていけるか、そういうことを中心に考えていかなければいけないのではないか。

○永松座長

雇用の関係では、二次産業がある程度発達しているところの方が、所得が高い傾向がある。地域で価値をつけて外に売るか、来てもらって消費してもらうかしか、豊かになる方法はない。ビジョンの中には、産業クラスターにより新産業を興せないかということも入っているようである。

今日は思いを語っていただく場としたが、思い浮かんだことについては、事務局に伝えて欲しい。

(４) その他

事務局・中畑より、今後のスケジュールおよび地域づくりに関する意見収集について説明があった。

4 閉 会

以 上